篠小だより

～学ぶ　つながる　篠原の子～

令和６年1月９日

１月号

〒222-0022 横浜市港北区篠原東三丁目２７番１号　　TEL045-401-9532　　fax045-431-9538

１月１日に発生いたしました令和６年能登半島地震におきまして亡くなられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、ご遺族の皆様にお悔やみを申し上げます。また、被害にあわれた方々やその後関係の皆様には心からお見舞い申し上げます。

篠原小学校としましても、今週中に行う予定の避難訓練の際に黙とうを行い、亡くなられた方々に祈りをささげるとともに、防災、減災教育にもより一層力を入れて取り組んでまいりたいと思います。

一日も早い復旧、復興をお祈り申し上げます。

新しい年 新たな場面で 新たな学びの姿を目指して

副校長　三上 顕

下の写真、何をしている様子かわかりますか？これは、算数の授業を校庭で行っているところです。「あれ？校庭で算数の授業？」と思われたかもしれません。１１月に実施した授業参観の折に6年生で実践した授業が発展し、実際に校庭に出て平行四辺形をかいている写真なのです。しかも、4年生と6年生の合同で。6年生にとっては6年間の図形学習の総まとめとして、4年生にとっては平行四辺形等の四角形の学習のまとめとして目標が一致し、職員室で授業についての会話をしていた職員同士でたまたま生まれた授業です。

少しこの授業の概要をお話しします。作図の学習は、正しい図形のかき方を知り、正確にかけるようになることはもちろんですが、それ以上のねらいがあります。それは、学んで得た知識を活用することです。平行四辺形であれば、「向かい合う2組の辺が平行」という学んだ図形の特徴（知識）を使って、2枚の三角定規を平行に動かすことによって正しい作図ができます。ここで大切なのは、観察した図形の特徴から類推して作図の仕方を考えることです。「作図ができる」という結果だけではなく、なぜかけるのか、どのように考えたのかということが重要なのです。校庭に大きな平行四辺形をかくとすると、子どもたちが持っている小さな三角定規ではかくことはできません。そこで、これまで学習してきたことを総動員して、図形のどんな特徴を使ったら作図できるのかを考え、試行するのがねらいです。

校庭にかくという、今までテストなどの問題上で聞かれたことがない学習の文脈に、参観当日の子どもたちは戸惑っていました。しかし「向かい合う2組の辺が平行」という特徴が今回の場面では使えないことに気付くと、別の特徴がこの場面で使えないかと思考の方針転換を行います。さすが6年生です。参観当日とその後の学習を使い、6年生で学習する「拡大図・縮図」の考え方と、4年生で学習する「対角線」が使えることを見いだしました。

当日の子どもたちの様子はとても興味深いものでした。4・6年生の混合グループでしたが、4年生側が立てた作図の方針を聞き、6年生が助言を加えながら作業が進んでいきます。6年生は気付いています。メジャーを使って頂点の位置だけ分かれば対角線は引く必要がないことを。でも、4年生の学習にきちんとお付き合いをして、対角線を引きました。それが6年生の学びにとっても功を奏します。対角線の長さを調べ直して、かいた図形が平行四辺形でないことに気付き、その場でかいた対角線を用いて正しく修正することができました。対角線の長さという特徴から、平行四辺形という図形をとらえ直したことになります。ほかにも、あるグループは、いったんかいた図形をもう少し大きくするために、対角線を使って図形を引きのばしました。その結果長方形に図形が近づいたことで、長方形が平行四辺形の仲間であるという関係に気付いた子どもがいました。これは、多くは中学校で扱う図形の見方ですが、小学校ですでにその経験ができたことになります。校庭で行ったことで、もっと図形を大きくしたいと場面を発展させたり、ほかの図形も作図できそうだと扱う図形を自ら広げたり、図形同士の関係に気付いたりなど、学びをさらによりよくしようという姿が生まれ、子どもたちの動きも参観当日の戸惑いから変わっていきました。一つの学習課題で違う学年同士が学び合う姿も見ごたえがありました。

今回紹介した授業以外にも、篠原小学校では今年度様々な授業が生まれました。身の回りを図形の視点から見渡して形の便利さを考え、学んだ知識をより深める授業。MY実験を通して疑問を生み、生まれた疑問を解決し続ける授業。地域でお世話になっている方に実際に来ていただき、地域防災の必要性とそこに従事する人の思いについて考える授業。それぞれ違う説明文の構造自体を比較して、よりよい伝え方について考える授業・・・教室を巡回していると様々な授業の場面と、そこで考えている子どものよりよい姿に出合い、とてもうれしい気持ちになります。

学んだ知識は場面が変わっても使える生きて働く知識に。新しい場面に出合ってもこれまでの学びを工夫改善して対応できるように。得られた結果を自らさらによりよくしたくなるように。これらの能力は、これからの時代を生き抜く子どもたちに必要な能力といわれています。そこに向かう授業づくりに挑戦する子どもたちや教職員を、今年も応援していきたいと思います。

2024年　本年もどうぞよろしくお願いいたします。